

中国の古典に学ぶ ～「中国古典の言行録」より

人を玩(もてあそ)べば徳を喪(うし)ない 物を玩べば志を喪う

召 公

今月のブログは、宮城谷昌光さんの「中国古典の言行録」(文春文庫)から引用させていただきました。同書によれば、この箴言は「書経」に記載されているとのこと。「書経」とは、中国古代の歴史書で、堯や舜、夏、殷、周の各王朝における天子や諸侯の政治上の心構えなどが記載された書物です。この箴言は、周の武王が殷を倒し、天下を取ったときに、天下取りを助けた召公が、武王を諫めた言葉とされています。

「遊ぶ」という表現は、現代的感覚では、かなり特殊なことを指すと思われるかもしれませんが、他者を傷つけたり、他者が嫌がることを行ったり、強制したりするようなことは、それをされた側からすれば、玩ばれていると感じることもあるのではないのでしょうか。こうした見方からすると、現代のハラスメントはまさに「人を遊ぶ」こととも考えられます。

ところで、今まで、職場のハラスメントの場合、被害者や職場環境への負の影響等が語れることが多かった気がします。加害者側からのアプローチも重要であり、近年は、精神医学や心理学などからの研究や取り組みも進められているようです。

こうした科学的なアプローチも、もちろん大事ですが、ハラスメントを行う人は、この箴言にあるように、自らの「徳」を確実に喪っているということを認識することが大事だと思います。ハラスメントという言葉がない時代には、今思えば本当に酷いハラスメントをする人がいました。当人は、気付いていない、あるいは自らを正当化しているかもしれませんが、ハラスメントをされた側は、そのことを忘れませんし、悪評は後々も消えることはなく、「#Me Too 運動」のように、過去の行為が厳しく糾弾されることもあります。これこそまさに「徳」を失った象徴的な結果といえるのではないのでしょうか。

なお、上に述べてきたことは、指導者である職場の管理者の方だけでなく、職員の皆さんそれぞれに関係があります。人は感情の動物なので、一時の衝動等に突き動かされ、パワハラや人に辛く当たるなどの行為をしてしまうことがあります。それは、自らの「徳」を失っているということ、是非心に留めておいていただきたいと思います。

後段の「物を遊ぶ」ことについてですが、これはいろいろに解釈することができます。自然物は別として、食品にしろ、日用品にしろ、この世の多くの「物」は、人の手を介して「物」として成り立っています。その「物」は、ただの「物体」ではなく、作り手の「思い」や「心映え」などが反映しているものなのです。多くの方は、子どもの頃に、「物」を大事にするように教えられてきたと思いますが、これは、奢侈を戒めるとともに、こうした作り手の「思い」などに心を寄せることの大切さを説いたものと思われます。「物」を粗略に扱うようなことを繰り返していると、そのような気持ちの分からない人間となってしまう、本来その人が持つべき生き方の指針、「志」を持つことができないように思われます。

一方で、必要以上に「物」に執着することも、見方を変えれば「物を遊ぶ」こととも言えます。「物」には限られないかもしれませんが、何か一つの物やことに執着すると、人は周りのことが見えなくなり、その人本来の生き方や当初の目的などを見失ってしまうことがあります。これは、あくまでも個人的な解釈ですが、この箴言では、こうしたことも「志を喪う」と表現しているようにも思われます。

令和 7 年(2025 年)5月



一般財団法人 かながわ水・エネルギーサービス
理 事 長 松 井 聡 明